

井上泰山 大木康 金文京 氷上正 古屋昭弘 共著

『花關索傳の研究』

汲古書院 一九八九年 四一四頁

小説『三國演義』に登場する、關羽の息子の「關索」という人物は歴史上實在する人物ではない。しかも『三國演義』の現存する最も古い版本である嘉靖元年刊の『三國志通俗演義』（嘉靖本。以前は弘治本と呼ばれた）には關索はでてこず、毛宗崗本をはじめとする、嘉靖本以外の版本にあらわれるという、『三國演義』の登場人物のなかでは極めて特異な存在であるが、詳細については憶測の域を出なかった。ところが一九六七年に上海近郊のある墓の中から、明成化年間刊行の説唱詞話十一冊が発見され、世の人を驚

かせた。そのうちの一冊が『花關索傳』という、花關索を主人公とする物語であった。その『花關索傳』について、さまざまな角度から研究をおこなったのが、本書『花關索傳の研究』である。

本書は小川環樹博士の序文にはじまり、Ⅰ解説篇、Ⅱ校注篇、Ⅲ資料篇、Ⅳ影印篇、Ⅴ附論、Ⅵ索引篇の六編からなる。本書のあとがきによれば、共同著者である五氏は、一九八三年四月より『花關索傳』輪讀會をひらかれ、翌八四年七月までに全書を讀了されたとのこと。その輪讀會の最大の成果がⅡの校注篇であろう。『花關索傳』は、小川博士の言を借りれば、「無数の誤字と當て字に満たされ、これを解讀するのは決して容易なわざではない」のであり、そのことが『花關索傳』研究において大きな障害となっていた。その校注が世界に先驅けて、ここに發表されたことには、絶大なる評價を與えてよい。校注篇が中國語で著わされていることは、著者達自身が初の校注であることを十分意識し、海外研究者の便宜を圖つたものと思われる。五氏のなみなみならぬ努力とその姿勢には、敬意を表したい。

この輪讀會のちも、五氏はそれぞれの専門とする分野において研究を続けられたようである。その各氏の研究に基づいて、本書の解説篇、資料篇、附論、索引篇はまとめられている。各篇を簡単に紹介しよう。

Iの解説篇は、金文京氏が『花關索傳』について、大量の資料をもとに考察をくわえたもの。解説篇については、後で詳しく述べることにする。

Ⅲの資料篇は、關索に關する多方面にわたる資料を大木康氏がまとめたものである。まず「一、關索の綽號について」では、「關索」という綽號をもつ人物についての記事を宋から清にかけての文獻より集める。「二、西南地方と關索」では、關索と關係が深い雲南と貴州の關索という名のついた地名に關する文獻、この地方に残る關索に關する傳説を、「三、關索の故事」で、關索の前身ではないかといわれる關三郎と、關索の妻についての資料、現代の京劇、地方劇のうち關索の登場する作品を紹介する。最後が「四、關索研究文獻目錄」で、關索、『花關索傳』及び成化本説唱詞話に關する國內外の研究論文を列挙する。この資料篇

に收められている資料のほとんどを、金氏が解説篇での考察に使用しており、言ってみれば資料篇全體が解説篇の注の役割をもはたしていることになる。

Ⅳの影印篇は、『花關索傳』の原本の影印。

Vの附論は、古屋昭弘氏が「説唱詞話『花關索傳』と明代の方言」と題し、語學の方面から『花關索傳』の成立と背景を探ろうとするもので、結局「江南における彈詞の祖型にあたる演藝が吳語圏の人の手によって寫定され、讀みものとして印行されたもの」であり、出版されたのは北京だが、成立したのは南方であろうと推定しておられる（早稻田大學『中國文學研究』一〇一九八四 所載の同名論文に手を加えたもの）。

Ⅵの索引篇は、氷上正氏が『花關索傳』の中の口語的語彙や俗語などをピンイン順にまとめたもの。他の俗文學作品を研究する際にも貴重な資料となろう。

このように、本書は『花關索傳』の原本（影印篇）、校注、關係資料、解説、語學方面からの考察、語彙索引と、まさにいたれりつくせりの書といえる。『花關索傳』研究のため

めには、本書一冊を持っていれば事足りるといってもよからう。『花關索傳』に關して、これだけ詳しく、體系だった研究をおこなった書がなかった以上、今後『花關索傳』をどのような角度から研究する場合でも、本書が基本書となるわけで、逆に言えば今後さまざまな批判も受けるであろう、いわば叩き臺となる書であるとも言える。

以上ざっと紹介したが、このうち古屋氏の附論については、中國語學に關する専門知識を何ら持ち合わせない評者には、これを論評する力はない。また、校注篇について批評するのであれば、一部分だけを見るのではなく全體に涉らなければ、著者達に對して失禮であらうと思うが、今回評者にはそれだけの時間はなかったので、校注篇についての考察は別の機會に譲ることとした。また、資料篇について論評するとすれば、遺漏を捜すことぐらいであろうが、それも單なるあげあしとりにしかならないだろう。そこで今回は、金文京氏の手による解説篇のみを詳しくとりあげ、若干の意見を述べることにしたいと思う。

解説篇は、六つの章に分けられ、それとは別に〔補説〕

として『成化本説唱詞話』發見の経緯」が加えられている。この〔補説〕は以前に發表されたもの（松家裕子・金文京「成化本説唱詞話發見簡報」『東方』第八十五號 一九八八年四月）に、そのうち金氏と復旦大學古籍研究所の李慶氏（一九八八年十月より金澤大學に來講の研究によって明らかになった、成化本の出土した墓の主の問題をつくくわえたものである）。

各章の内容を紹介しよう。第一章は「成化本説唱詞話について」。これまで元代の詞話というのは文獻にその名はみえるが、現存するのは明代のものだけなので、どのようなものかわかっていなかった。成化本は明成化年間の出版だが、『花關索傳』は重刊本であり、作品自體の成立が元代であることはほぼ間違いない。つまり『花關索傳』こそが元代の詞話の實物なのだ、ということである。中國の講唱文學は、詞曲等の長短句による樂曲系と、主に七言の齊言句による詩讀系とに分けられるというのが定説であるが、樂曲系が文學化されたのに對して、詩讀系は民間レベルにあったため、現在まで傳來するのは樂曲系が中心で、

詩讀系は唐の變文のように出土品に頼らざるをえない。

『花關索傳』は明らかに詩讀系の作品であるから、もしこれが元代の作品であるなら、唐の變文、宋の陶真、崖詞、元の詞話、明清の彈詞、鼓詞へと、詩讀系講唱文學の流れがはつきりすることになる。従つて成化本説唱詞話の俗文學史における意義は、金氏の言によれば「敦煌變文の發見にも匹敵する」ことになる。

第二章は『花關索傳』の體裁。成化本の他の作品が、全て明代の小説などと同じように挿圖が半葉をしめるのに對して、『花關索傳』だけは元代の『三國志平話』などと同じく上圖下文形式である。そのことと、使われている語彙に元代の平話と共通するものがあることを、『花關索傳』が元代の作品であるとする根據としている。

第三章は『花關索傳』の内容。『花關索傳』の内容を紹介し、それが徹頭徹尾花關索を主人公にした物語で、『三國志』とは關係のない、荒唐無稽な話であることを示す。

第四章は『花關索傳』と『三國演義』。ここでは『花

關索傳』の内容のうち『三國演義』と共通する部分を、『三國演義』の現存諸本と比較する。

まず嘉靖本には關索は登場しないので除外。そして鄭少恒本、楊起元本、余象斗本など『三國志傳』系では、花關索が母とともに關羽のもとに現われ、西川の征討に活躍、のち雲南に派遣され、そこで病死する、という内容。關索の生い立ちなど『花關索傳』と同じ部分が多い。そして、花關索の話は雜劇、平話、演義とは別の次元で發生したもので、それをそれまでの『三國演義』の版本に後から挿入した可能性が強く、その挿入の際に用いられたのは『花關索傳』にきわめて似た話、しかもテキストではなく口頭文學からであつた可能性もある、と金氏は推定する。

ここで金氏は、嘉靖本において關興の二度の出現が唐突であることをあげ、もともと關索の話だったのを、嘉靖本では關興にかえた可能性もあるが、やはり『三國志傳』の編者が嘉靖本系テキストの不備に乗じて關索に結びつけた、つまり關索傳説をあとから挿入したと考えるのが妥當であろう、と結論づけておられる。これについての補足だが、

嘉靖本の關興は關羽が樊城で于禁らの曹軍を水攻めに破ったあと突然現われ、關羽の使者となって成都へ赴く。その登場のしかたはあまりにも突然で、確かに不自然に思われる。しかしその次、張飛の死後すぐ登場する場面は、たしかに突然ではあるが、ここでは張飛の遺兒張苞とともに登場する。このあと、關興と張苞は行動をともにすることも多く、この二人は對で考えるべきであろう。評者は『三國演義』の作者が後半の役者不足を補うために、『三國志平話』などの材料にはでてこないが實在の人物であるこの二人を登場させたのではないか、と考える。

『三國演義』のもう一つの系統、周曰校本、劉龍田本、李卓吾本、毛宗崗本などでは、關索は孔明の雲南遠征の際に初めて登場し、ほとんど活躍らしい活躍もせずに消えていく。

この結果、前者と後者の二つのタイプの關索に関する話が存在し、前者は『花關索傳』と同系統の語り物によって、嘉靖本がもとづいたのとは別の異本に關索の話を挿入したものの、後者は嘉靖本にもとづき、傳説などにも影響されて、

孔明の南征に關索を登場させたもの、と金氏は考える。

ただそうすると『三國演義』作成段階で、一度削られた關索の話が、のち再び付け加えられたことになり、非合理的な話が次第に合理化していくという小説史の流れに逆行するのではないか、という疑問への反證として金氏は『三國志玉璽傳』を挙げておられる。これは、清代の彈詞で、形式、用語などは『花關索傳』と同じ點が多く、元明の詞話と繼承關係がある。おそらく『三國演義』をもとに韻文化されたもので、内容は基本的には『三國演義』に忠實だが、玉璽の話、關索の話などが付け加えられている。従って、『三國志玉璽傳』は韻文の詞話から散文の小説へ、民間傳説を多量に含む作品から、より史實に近い作品へという文學史の流れに反する。このように文學史の常識はしばしばくつがえされるものであり、『三國演義』で一旦削られた關索説話のち再び加えられたと考えることには、無理はないのだ、と金氏はされる。

『玉璽傳』のような民間レベルの作品に文學史の常識をあてはめるのは、少し無理があるような氣はするが、それ

はともかく、『三國演義』や『水滸傳』のように完成度の高い小説が編まれると、それ以前にあった作品で、小説にはない内容のものはすたれていき、それ以後は同題材、別内容の作品はできにくく、基本的にはそれらの小説に多少手を加える程度の作業のみが行なわれるようだ。『花關索傳』は民間レベルの作品であったために、『演義』成立にも關係なく生き延びることができたのであり、後に逆に『演義』の一部版本にも影響を與えることになったことは、これまでの常識をくつがえすものであることは確かであろう。

金氏はさらに『三國志平話』と雜劇を『花關索傳』と比較し、かなりの共通點があることから、『花關索傳』の成立が元以前であることの有力な傍證であるとされる。

金氏はこのような思考をもとに、『三國志演義』の版本について——嘉靖本と建安諸本を中心に——と題する研究發表を行ない（日本中國學會第四十回大會 一九八八）、また『三國演義』版本試探——建安諸本を中心に——（『集刊東洋學』第六十一號 一九八九）という論文も發表されている。

第五章は『花關索傳』と民間傳承。『花關索傳』のうち、『三國演義』と共通しない部分について、その起源を民間の傳承や演劇の中にさぐる。

まず「民間説話」では、關羽の夫人胡金定、元宵節に關索が迷子になること、關索の夫人たちなどについて、内容の類似する資料を擧げる。つづいて關羽の刀について、『花關索傳』では關羽の刀が水中に沈んだあと關羽が死に、その刀を關索がすくいあげて、復讐戦にのぞむ。關羽には刀、あるいは水に關する説話がほかにもあり、關羽は刀神、水神としての性格を有していたのでは、と推理する。また、明萬曆年間の文人錢希言の『獮園』に引く當時の詞話では、『花關索傳』と同様、花關索は小人であったとある。また美少年であったという説話があることも擧げる。

關索が小人であることは、疑問の餘地はないが、『花關索傳』の挿繪では關索は全く小人として描かれていないのはどうしてだろう。一番顯著なのは後集の六a（本書、影印篇二六九頁）の繪。關索は大男であるはずの關羽とほぼ同じ

體格である。挿繪はおそらく出版の際に版元が繪師に描かせるのであろう。『花關索傳』の繪師が本文を讀んでいたかどうか、あるいは字を識っていたかどうかは不明であるが、少なくとも當時流行していた關索説話の大體の内容は知っていたであろう。『花關索傳』が出版された頃には、

「關索」小人」というイメージはあまり強くなかったのではなからうか。これについては、立間祥介氏が「花關索傳の『花』と『少年浪子』」（『藝文研究』第五十四號 一九八九）で、『花關索傳』では身長四尺五寸の花關索が『三國志傳』では七尺となっていることをあげ、當時の聽衆は花關索が小人であることはとくに意識せず、少し背は低いが武勇は拔群の好漢と見ていたのではないか、『三國志傳』の「七尺」はそういう聽衆の見方が反映したものであろう、とおられる。

次に「農民起義」について。宋から明代の農民起義の指導者に關索の綽號を持つ者が多い。『花關索傳』でも太行山の盜賊が關索の手下となる。また關索の嫁取りについて、『齊東野語』にある金末元初の山東の李全の話と極め

てよく似ており、山東のこのような群雄の動きは『水滸傳』『三國演義』『花關索傳』の成立と關連があるのではないか、と金氏は豫想しておられる。

次に「京劇、地方劇」。現在の京劇、地方劇に『花關索傳』との内容の共通する點をあげる。

そして「雲南、貴州の地名」。『三國演義』でも『花關索傳』でも關索は雲南と關わりがあるが、その雲南と貴州には關索にちなんだ地名と、關索にまつわる傳説がある。元初のフビライによる雲南平定の折りの、將軍ウリヤンハタイとその子アジュの行軍ルートと關索の名のついた場所が大體重なることなどを根據として、關索にちなんだ地名はウリヤンハタイとアジュの活躍を投影しているのでは、と金氏は推定される。これだけの材料でそのような推定をすることには、少し疑問を覚えるのであるが、このことはまた後で述べることにする。

その次は「民間信仰」の項。錢希言の『獮園』は花關索を「淫祀」の項に收めている。つまり、民間信仰の對象となっていたわけである。唐の范攄の『雲溪友議』『玉泉記』

の項に關三郎という神が玉泉山にまつられていたとある。

玉泉山といえは關羽顯聖の地であるので、この關三郎が關索の前身ではないか、とする周紹良氏、金氏の意見は道理になつてゐる。なぜ邪神が關羽の息子になつたかについては、二郎神や那吒太子が歷史上の人物の架空の息子であるという傳説があることをあげ、中國では神話傳説の類は歴史事實と結びついてはじめて命脈を保つことができるのだ、と結論づけてゐる。

ここで、五代の『北夢鎖言』に關三郎が鬼兵を率いて長安に入城するという流言があつたことが指摘されているが、玉泉寺開基に關して、關羽が鬼神を役つて寺を建てたという傳説があり（宋の黃休復『益州名畫錄』など。拙著「紹介・湖北省三國關係遺跡」『中國文學報』第四十冊、を参照のこと）、神兵を率いるという點が似てゐる。關羽顯聖の傳説には、「關王父子」として現われることもあり、子とは關羽とともに死んだ關平のことと考えるのが妥當であらうが、關索である可能性もあるかも知れぬ。

そして、安徽の池州の儺戲と雲南の關索戲に花關索の演

目があり、それに關する中國での發表を紹介する。池州の儺戲はその演目も文句も成化本說唱詞話に極めて似ており、おそらく成化本と同系の本を脚本とした演劇である。雲南の關索戲も儺戲と同様の性格を持つ。

第六章は『花關索傳』の文學史的意義。これまでの章をまとめ、『花關索傳』の持つ文學史的な意義を考える。

まず、第一に花關索の物語によつて『三國演義』の諸本を比較検討することにより、その流れが明確になつた點。それにより金氏は斷定は避けながら、『三國志傳』系のテキストに花關索の話をつけくわえたのは、その『三國志傳』系のテキストを出版した建安の余象斗ではなかつたかと、推論を展開しておられる。第二に、『花關索傳』の舞臺は『三國志』の世界だが、登場人物は『水滸傳』の豪傑風であつたり、『西遊記』の妖怪風であつたりする。『花關索傳』には明代以後、歴史小説、盜賊小説、神魔小説に分化する要素が渾然と入り混じつており、社會一般の嗜好を反映した、白話小説の前段階の姿と言える、ということ。第三に講唱文學の歴史を理解する上で重要な資料である點。



つまり、第一章で述べられているように、詩讚系講唱文學の流れが明白になったこと。また池州儺戲のように詞話が演劇の臺本に用いられた場合もあり、儺戲は詩讚系演劇であると言え、中國の演劇には元の雜劇や明の傳奇などの樂曲系と儺戲など詩讚系の二つの種類があったことの傍證となる。この詩讚系の演劇については、様々な資料をもとにその存在を推定した、小松謙氏の「詩讚系演劇考」（『富山大學教養部紀要』第二二卷一號 一九八九）という論文がある。最後に比較文學研究にとっても興味深い資料であること。つまり『花關索傳』は花關索を主人公とする英雄敘事詩と言え、中國には西洋のような英雄敘事詩は存在しなかったという、從來の文學史家共通の認識を覆すもので、世界文學における中國文學の特殊性と普遍性を考える上で、重要な問題である、とする。

この解説篇全體を見ると、小川環樹博士の論文「關索の傳説そのほか」（『岩波文庫』『三國志』第八冊附録 一九六四）が一つのベースになっているようだ。日本で初めて關索の問題をとりあげたのが小川博士である。この論文では、『大

明一統志』などに見える關索嶺の記事、宋代の書物にある關索をあだなとする盜賊の記事を挙げ、さらに貫索九星という星座があることに觸れ、貫索という神が三國物語と結びついて關索となったのでは、と推察しておられる。さらに關索の記述について、『三國演義』に二種類の系統があることも指摘されている。小川博士はこの論文で『花關索傳』發見以前にその存在を推定しておられ、その炯眼は驚嘆に値する。この論文をもとに、さらに大量の資料を用い、さらに考證をすすめたのが金氏の解説篇であると言えよう。貫索九星に關して、本書の著者の一人、氷上正氏は「『花關索』研究ノート」（『無名』四 一九八四）の中で、『水滸傳』の英雄の一人、病關索楊雄は天牢星の化身とされており、天牢星が貫索九星の別名であると指摘しておられる。第五章の、雲南と貴州に残る關索にまつわる地名について、金氏がウリヤンハタイとアジュの活躍の投影ではないか、としていることについてだが、金氏には「關羽の息子と孫悟空」（『文學』第五四卷第六號・第九號 一九八六）という論文がある。この論文の内容の大半は本解説篇のなかに、

反映されている。この論文では花關索を劍の英雄、小童、水神の三つの面から分析、孫悟空にも同様の性格を見出だし、兩者の類似性について言及する。そして、『花關索傳』が「中國におけるほとんど絶無僅有の英雄敘事詩であった」としている。この論文の劍の英雄の項では、アーサー傳説、サルマート族のナルト神話、朝鮮や日本の神話などとの比較により、世界の神話が共有する劍の英雄たちのなかに花關索を加えることを主張する。そして「おわりに」と題した項では、アーサー傳説に影響を与えた可能性が指摘されているサルマート族について興味深い考察がある。サルマート族は紀元前四世紀から紀元後四世紀に南ロシア平原に活躍した遊牧騎馬民族で、その一派であるアス族はモンゴル西征の際征服され、一部はモンゴル軍に編入され、關索と非常に關係の深い雲南への征服戦にも参加している。金氏はそれだけで『花關索傳』との關係を主張しているわけではなく、その可能性を示しただけであるが、全世界的な、スケールの大きなその發想は非常に畫期的なものであった。本書ではさらに深い考證があるのではと期待してい

た。ところが、この點について本解説篇では全く觸れられていない。ウリャンハタイ（元良合臺）とアジュ（阿速）父子について讀んだとき、評者はこの二人がアス（阿速）族なのかと思ったのだが、『元史』の傳（元良合臺は卷百二十一、阿朮は卷百二十八）によると、二人はモンゴル族である（全くの餘談だが、『水滸傳』の梁山泊の頭目の一人、張順のモデルであろうといわれる宋の部將張順を、襄陽で攻め殺したのがアジュであるというのは、なんとも面白い偶然である）。この二人が率いていた軍にアス族がいたということになる。おそらく、金氏がウリャンハタイとアジュが關索の一種のモデルではないかという假定に至ったのは、アス族が雲南征服に参加していたという事實から發展したものではないか、と思われる。しかし、アス族の件が本書にない以上、突然ウリャンハタイとアジュがでてきても、讀者はとまどうばかりである。それに、文學的な意義は別にして、關索の問題で最も興味深いのは、一體關索がどこからあらわれたのか、ということではなからうか。確かに金氏は本解説篇のなかで、その前身として邪神の關三郎をあげておられる。しか

し、それが百パーセント正しいわけではなからう。實際にアス族が關索説話と關係のある可能性がどのくらいあるかは別にして、本解説篇でそのことに全く觸れないのは、納得がいかない。もちろんこの論文は資料篇の論文目録に含まれているし、第五章の1の(6)小人の項で、この論文の名も擧がっているが、そもそも本書は『花關索傳』を研究するための基本書としての性格を持つことをめざしたものであるはずで、それならば盛り込めるだけの資料を盛り込むべきではないか。おそらく金氏は確證のないことでもあり、一度發表したものであるので、採用されなかったのではないかと思うが、實際解説篇には一般的な事實の羅列ばかりでなく、金氏の考えが大いに反映されているのであるし、先程述べたように論文「關羽の息子と孫悟空」の半分ほどは本解説篇と重複しているのであるから、このことを本解説篇で取り上げない理由はなかったと思う。

もう一つ、わたしが疑問に思うのは「花關索」という名が先か、「關索」という名が先かという問題である。關三郎が關索の前身ならば、「關索」が先ということになり、

その關索にどうして「花」という語が頭についたのか、という問題になってくる。「花」に關しては、水上正氏が先にあげた「花關索」研究ノート」の中で、刺青のことではないかと指摘、立間祥介氏もこれに同意しておられる。しかし、どのような考えも憶測の域をでないわけで、もちろん評者にもはつきりしたことは言えないのだが、『花關索傳』では、「花關索」の三文字が名前（つまり、「花」が「關索」を形容する言葉ではない）で、花、關、索と恩人の姓を一つずつとって名とした、というのはあまりにも不自然である。たとえその不自然さに目をつぶったとしても、本來は關羽の息子であるのだから、關を頭にもってきて、關花索とか關索花というような名にするのが普通であらう。このことについては、花關索という名があらかじめあって、それに理由をつけるため、つまりは關羽の息子と結びつけるための苦し紛れの理由づけと考えるのが、最もわかりやすいのではなからうか。金氏は、第四章で、『三國志傳』系の關索の話を、花關索の物語と名付け（周曰校本系には花關索という名はみえない）、「特に花關索という名前は、民間

の傳説や宗教と關係があるように思える。」(四二頁)とされている。しかし、第五章の6の(a)池州儼戲の項で、儼戲の假面について觸れ、その注で「花關索の「花」が元來何を意味したかは定かでないが、あるいはこのような儼戲の假面に由來するかも知れぬ。」(注59)とされているから、金氏も「關索」が先と考えておられるようだ。第四章の3「花關索と關索」では、『三國志傳』系に基づいたもの(花關索の物語)と、周曰校本系が據ったもの(關索の物語)の二種類の關索説話が存在したとしているが、その段階ではどちらにしても關羽の息子であったことには變わりないわけである。しかし、それよりずっと以前に花關索というものがあって、それが關三郎が何かと結びついたとか、花關索と關索がもともと全く別のものとして存在し、後に二つが合體したというようなことは、考えられないだろうか。

以上、紹介と若干の意見を述べてきたが、自ら「あげあしとり」は避けたいとしながら、とても批評とは言えない、些細な點を取り上げるにとどまったことは、ひとえに評者の未熟さによるものであると同時に、それだけ本書が充實

していることを示すものであろう。途中でも述べたことだが、本書が『花關索傳』について、はじめて體系的に研究された書であることには、絶大なる評價を與えるべきである。しかも異なる大學の、異なる分野の専門家が集まって、各自の得意分野にうでをふるったというこの共同研究の形は、今後の研究における一つの理想的なパターンを示したものと言えよう。また、本書は『花關索傳』研究にはもちろん、『三國演義』研究、さらには俗文學全般の研究において避けては通れない書である、と言っても過言ではない。そのなかでも特に、今後の『三國演義』研究においては、『三國志』、『三國志平話』、元雜劇など現存する資料以外にも、失われた、あるいは『花關索傳』のように土の中に眠っている書が存在することを、これまで以上に意識して進めていかねばなるまい。このことを自らへの戒めとして、本文の結びとしたい。

〔追記〕 一九八九年、アメリカのアリゾナ州立大學アジア研究センターから、"The Story of Hua Guan Suo"と題する『花關索傳』の全譯が出版された(二七九頁)。著者はゲイ

ル・O・キング女史 (Gail Oman King)。女史は現在ブリガムヤング大學のアジアコレクションの館長である。この本は、「序論」、「翻譯」、「影印」などの篇に分かれる。「序論」は講唱文學、『花關索傳』の内容、關索の名のついた地名、民間説話、『三國演義』の中の關索、などの解説。大體において正しい内容であるが、誤りではないかと思われる部分も少しあり、また著者自身による新しい考え方はほとんどないようだ。解説の對象の範圍も深さも、『花關索傳の研究』の比ではない(同年の出版であるため、當然キング女史は『花關索傳の研究』を参照してはいない)。翻譯部分に關しては、ざっと目を通すだけの時間しかなかったが、大きな誤りなどは見當らないように思った。ただ、原文で讀むのとはずいぶん感じが違ったのは、英語の性質によるものだろうか。しかしともかく、『花關索傳の研究』の校注に加えて、英譯が出版されたことは、今後の『花關索傳』研究にとって有意義であることは間違いない。同じ年に日本とアメリカで『花關索傳』の研究書が發表されたことに象徴されるように、今後『花關索傳』に關する研究が世界的範圍で展開していくであろうことは、素晴らしいことである。

なお、この『The Story of Hua Guan Suo』は、『花關索傳の研究』の著者の一人である金文京氏よりコピーを頂戴した。ここに感謝の意を表したい。

(富山大學 上野隆三)